

うきたむ

第20号

2002.11.5

山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館館報

山形県東置賜郡高島町大字安久津2117 TEL0238-52-2585
FAX0238-52-4665



▲体験教室・勾玉づくりに挑戦

次のステップめざして

山形県教育庁社会教育課
文化財保護室長

田 中 信 雄

山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館が開館十周年を迎え誠に喜ばしい限りであります。今日のように年間およそ一人もの参観者を数え、親しまれる資料館を維持できるのは、館長さんをはじめ職員の皆さんの数々の努力はもとより、豊富とはいえない県予算の中で研究・展示等の活動を支えていただきました高島町関係者や考古学界のみなさん、多くの地元のみなさんや県内各地の教育関係者の深い理解があったからこそであると考えております。誠にありがとうございます。

また、これまでのいきさつをふまえて、さらに資料館とその活動が発展できるよう、各位の更なるご理解とご支援を切にお願いしたいと存じますので、よろしくお願いいたします。

さて、考古学に縁遠かった私にも、やや若い頃、城輪柵跡の文献に触れたり、高島町と並ぶ遺跡の里群馬県笠懸町で岩宿遺跡と相沢忠洋氏のことを見聞きしたり、県史で菅井進氏のことを読んでいたことがあります。加えて最近、山形県立博物館で実物の「縄文のヴィーナス」を見たり、小山崎遺跡発掘現場での、発掘してそう時間を経っていない、鮮やかな赤漆塗りの土器などに遭遇し感動を覚えたことで、だいぶ身近さを感じています。そうすると、知りたいこともいっぱい出てきます。

どうか、研究・展示・交流活動などにお一層の研鑽を積みまますとともに、私のような新任者、学生や子どもにもわかりやすく、従来以上に多くの人々に親しまれる普及活動にまい進されませう、またそれとあいまって資料館を包みこむ古の里歴史公園や町が人々の交流の渦でおおいに賑わい発展するよう念願し、次の「十年」に挑戦する様々な企画に期待を寄せている次第です。

のあゆみ



館の全景



常設展見学の
小学生たち
(2001年6月13日)



秋の遺跡めぐり
白石城にて
(99年10月3日)



160名集まった
三内丸山の講演会
講師は三内丸山対策室
岡田康博氏(当時)
(99年6月10日)



縄文食をつくる
石器で魚を切る
「縄文まつり」にて
(93年9月30日)



はじめての「縄文
月見の宴」60名参加
(95年9月30日)



縄文料理づくり
(96年10月)

古代米の田植え
(96年5月)



写真でつづる 考古資料館10年

縄文体験教室
竪穴住居づくり
(95年6月18日)



縄文体験教室
勾玉づくり
(2000年7月30日)



開館10年の特別展・企画展 関連講演会講師など

年度	特別展テーマ	企画展テーマ	講演会講師
1993	第1回「縄文の四季」	・古墳と人々の暮らし	田中 琢 氏 工藤 雅樹 氏
1994		・一の坂遺跡と古代住居 ・発掘された中世	富樫 泰時 氏 入間田宣夫 氏
1995	第2回「よみがえる 縄文文化」	・やまがた古代の役所	岡田 康博 氏 小野 忍 氏
1996	第3回「縄文のタイム カプセル 押出遺跡」	・山形県の古代産業遺跡	吉岡 康暢 氏 佐原 真 氏
1997		・縄文の花開いて 一の坂・台の上展	佐藤 禎宏 氏 小林 達雄 氏
1998		・やまがたの弥生文化 水田稲作の始まり	須藤 隆 氏
1999		・やまがたの古墳と その時代	大塚 初重 氏 シンポジウム
2000		・縄文時代最後の世界	石川日出志 氏 シンポジウム
2001		・発掘された山形の 城館跡	伊藤 清郎 氏 シンポジウム
2002	第4回「やまがたの 縄文土器」	・(ミニ押出遺跡展)	小林 達雄 氏 安孫子昭二 氏

縄文体験教室
編布づくり
(98年9月13日)



縄文食を味わう
「縄文まつり」にて
(98年9月6日)



開館10周年 特別展 「やまがたの縄文土器」開催される!

縄文の美とわざ 咲き誇る千古の世界

考古資料館が開館して今年十年目にあたる。これを記念して、現在第四回特別展「やまがたの縄文土器」が開かれている。日本の国ができるはるか以前に一万年にわたって栄えた縄文時代、土器が語る縄文人の声を傾けてみよう。

一〇〇点を越える 土器の壮観

(財)山形県埋蔵文化センター、米沢市教育委員会、致道博物館をはじめ多くの施設の協力をえて三六遺跡から出土した一〇〇点が越える縄文土器が展示されている。



一〇〇点を越える。土器の出現期であり縄文のあけぼのともいえる草創期から弥生時代の土器まで、時代順にならべられ、遺跡写真や時代の特色を解説したパネルが、みる方々の参考になる。まことにぎやかに迫力を感じさせる展示となっている。

豊かだった縄文時代

かつて縄文時代は、みじめでまづしいくらしを送っていたと考えられてきた。ところが最近では大きく変わりつつある。自然と共生し、豊かなゆとりある社会であったことが次第にわかってきた。すぐれた手わざとおおらかさは、縄文人のこのころの豊かさをあらわす。一

万年もの間変わることなく続いたことも、変える必要がなかったからではないのか。だがその中に少しづつゆるやかな進歩が見て取れる。

縄文土器のなぜ

しかしながら縄文土器は依然として神秘的ななぞに包まれているところが多い。まず一貫して縄文にこだわっているのはどうしてか。また装飾の多い大きな土器を皆が作ることでできたのか。また文様はなにを表しているか。香炉型土器や注口土器はどう使われたのかなどなど。これらのなぞを解くことが



▲豪壮な縄文中期の土器
最上町水木田遺跡出土
(財)山形県埋文センター保管



ことができるだろう。ともあれ、縄文びとが何を語りかけてくるのか、じっくり目をこらし耳をかたむけてみようではないか。



▲珍しい座産土偶
羽黒町玉川遺跡出土 (玉川寺保管)

講演会のお知らせ

- ・ 第4回 特別展記念講演
- ・ 日時 11月17日(日) 13:00~
- ・ 会場 本館研修室
- ・ 講演 世界の中の縄文土器
小林 達雄氏 (國學院大学)
関東・東北の縄文土器
安孫子昭二氏 (東京都教委)